

〈書 評〉

大川嗣雄（横浜市立大学リハビリテーション科科长）・他 著

車 い す

津山直一（国立身体障害者リハビリテーションセンター総長）

車いすは義肢、装具、自助具などと並んで福祉関連機器として重要性を増し、近年非常に普及しつつある。片麻痺、対麻痺、脳性麻痺、両大腿切断、関節リウマチ、筋ジストロフィ等々車いすを身体移動機能の代用、補助に用いる症例は非常に多く、研究開発も日に進んでいる。

筆者が30余年前ストークマンデヴィルの脊損センターに学んだ時には胸髄損傷の対麻痺であっても広背筋の強化、両長下肢装具と両松葉杖による歩行が可能であり、その訓練を励行することを教えられたが、結局これは治療体操の一部として残る程度であり、実用的には車いす生活がはるかに有用であることが認識されるに至った。エネルギー消費が大きすぎ、日常生活のスピードにも適さないからである。

一方都市や家屋の障害者に対するアクセスの配慮はすすみ、車いすの生活がより容易になった。車いすスポーツも盛んに行われる今日である。

この障害者のリハビリテーションの有力な武器に対し今までまと

まった成書が少なかったが、本書はリハビリテーション専門医、リハビリテーション工学専門家の共著による教えられる所の大きな好著書である。

著者らの序にある「我が国で車いすを使用したり車いすを扱っている人達が、はたして正しい知識や技術をもって適切に車いすを動かしているであろうか。この点については、はなはだ心もとない限りである。そこで、われわれは車いすの基本的な知識を専門家から、できれば障害者の人達にまでわかるようにこの本をまとめることとした」と言う語は十分に目的が果たされている。

本書は日本における車いすの歴史と現状から説き起こし、公的給付制度、各種車いすの説明、工学者による基本構造の解説、車いす処方の意味と基礎知識につき詳述してある。

たとえば身体計測と車いすの基本寸法の定め方、車いす処方箋の書き方より、障害別の車いすの選択、車いす使用の基礎訓練として座位バランス、上肢筋力強化、前進駆動、方向転換と旋回、登坂、

悪路、段差乗り越え、キャスター上げ、片麻痺者の駆動、ベッド、椅子、トイレ、浴槽、床、自動車などから車いすへの移乗のし方と介助の具体的方法が述べられている。

さらに電動車いすと自動車、車いすと環境として作業環境と作業空間、個人住宅での留意点、車いす使用者に対する環境整備と横浜市における福祉のまちづくりとしての環境基準の具体例が説明される。また車いすの科学として移動具としての車いすの移動の特徴、走行特性、駆動特性、駆動時の筋活動パターン、座としての車いすの求められる機能、重心の位置の推定、国際標準化機構（ISO）の座の測定、座圧、シートポジショニングなどの記述に加えてパーツとアクセサリ、手入れと調整、重心位置推定法に及ぶ資料がくわしくそえられている。

のみならず、わが国の研究者による車いす関連参考文献が最後に掲げられている。まことに車いすのすべてと呼ぶべき、車いすに関して学ぶ者に非常に親切な書物であるが、158ページと簡潔に多くの写真、図、表を用いての記述が手ごろで読みやすい書としている。

（B5横判、頁158、図89、写真185、1987、¥3,700、〒300、医学書院刊）